

市町村新任保健師と熟練保健師の対話リフレクションの意味

村松 照美¹⁾ 渡辺 勇弥²⁾

要 旨

Y県下の3市町村の新任保健師と熟練保健師の6名が、保健師活動において不定期に実施していた対話リフレクションの意味を明らかにするため、1年間参加観察した平成17年度末に、各市町村保健師に半構造化面接法によって、対話リフレクションで語り合っていた内容、対話リフレクションの意味等について情報を得た。その結果、新任保健師の75文節から【実践での自己成長】【自己の課題明確化】【成長への足がかり】【成長への先輩の存在意義】の4つのカテゴリが、熟練保健師の103文節から【専門家としての成長】【新任保健師成長への役割】【共有することの意味】の3つのカテゴリが得られた。新任保健師と熟練保健師との対話リフレクションを通して双方が自己成長を実感し、その過程において熟練保健師は、メンターとしての機能を果たしていた事が示唆された。

キーワード：市町村、新任保健師、熟練保健師、リフレクション、メンター

I. はじめに

少子高齢社会の進展にともなって、地域には多様な健康ニーズが存在しそれに対しての多種多様な対策が求められている。医療制度改革が始まり、保健活動が大きな変革を迎える中で、安心・信頼の医療の確保と予防の重視を基本的な考え方におき、保健活動を推進するための行政の役割は重要となっている。平成6年地域保健法の成立以来、住民に身近な市町村が、保健活動の中心的な役割を担っており、ヘルスプロモーションの概念に基づいて地域住民の主體的な活動への支援と行政の地域保健活動を推進するため、専門職員の確保と資質の向上が重要であると指摘されている¹⁾。

保健師の力量形成については、久常や松下が予てより指摘しており、保健師の実践知から原則を導きだすことが必須であるとされてきた²⁾³⁾。また佐伯らが保健師の専門職務遂行能力の発達に関して報告⁴⁾し、また厚生労働省の看護基礎教育の充実に関する検討会報告において保健師教育の技術項目と卒業時の到達度(案)が提示された⁵⁾。さらにこのような動向を受けて、

厚生労働省の指定規則が平成21年度から改正実施となり、より専門性の高い保健師教育にむけて新しいカリキュラムが開始となるが、地域での多様なニーズに対応するために、保健師は日々の実践を通して力量形成をしていくことが必須となる。

澤本は自立的な研究者であり実践家である教師の力量形成をめざし、授業リフレクション研究を開発した。リフレクションとは実践を振り返って熟考することと定義し、授業リフレクション研究において、授業者自身の意見を明らかにし、授業の様々な可能性を吟味しながら実践的知識を拡充し、実践的思考を深める過程ととらえている⁶⁾。教師と保健師において実践内容は異なっているが、実践的知識の拡充と思考の深まりの点ではリフレクションの過程を看護にも活用できると考え、また中田ら⁷⁾や、近田⁸⁾らの看護におけるリフレクションの活用の報告からも裏付けることができると考えられる。

さらに澤本はリフレクションにセルフ、対話、集団リフレクションがあるとし、その中で2人ないし3人で対話をしながら実施する対話リフレク

(所 属)

1) 山梨県立大学 看護学部

2) 甲斐市役所

(専攻分野)

地域看護学

ション⁹⁾において、相手を鏡にして実践を言語化して導き出す、語りの重要性とその話し相手となるメンターの役割を位置づけている^{10)~12)}。看護専門職においては、菊池らがキャリア発達について将来を見いだす為に、職場の上司・先輩といった職場内の人間関係を基盤とする新人看護職へのサポートの重要性を指摘している¹³⁾。

筆者は、保健師の健康学習支援における力量形成において澤本のリフレクション方法を活用する効果を見いだした^{14)~16)}。また新任保健師が熟練保健師との対話を通して成長していることや、熟練保健師として果たす役割の重要性が示唆された¹⁷⁾。そこで本研究では、これらの結果をふまえ、市町村の新任保健師と熟練保健師が、職場に於いて実施している対話リフレクションの意味を明らかにしてきたところ、熟練保健師の役割について示唆されたので報告する。

II. 研究目的

市町村に働く新任保健師とそれに関わる熟練保健師が、職場において保健師活動の中で実施する、日常の対話リフレクションの意味を明らかにし、熟練保健師の役割を考える。

III. 用語の定義

対話リフレクションとは、日常の保健師活動の中で、一人ないし二人の相手と実践場面を焦点化し、互いに話し合うことをいう。

新任保健師とは、就職後5年までの保健師活

動にあたって指導の必要な新任時期の保健師をいう。

熟練保健師とは、就職後6年以上の中堅・管理者として保健師活動を継続している保健師をいう¹⁸⁾。

IV. 研究方法

1. 研究対象

Y県下に散在する市町村3カ所で、かつ様々な保健師活動において新任保健師と熟練保健師との対話リフレクションの場を不定期にもっていた市町村保健師6名。各保健師の所属していた市町村人口はA村3,000人、B町10,000人、C市70,000人であった。保健師としての経験年数は、新任保健師は3~5年、熟練保健師は26~38年の範囲であった。(表1)

2. データ収集方法

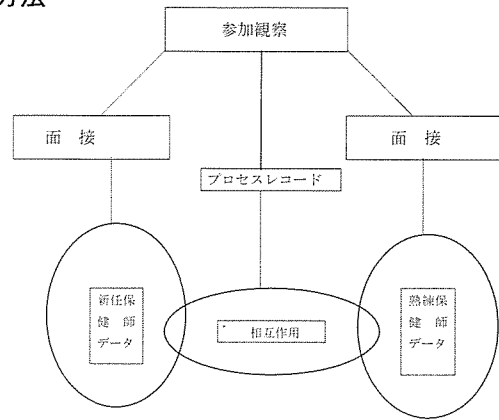
平成17年度の1年間において保健師活動に関する話し合いに参加観察しその状況をノートに記録した。年度末において、半構造化面接法を用い新任保健師、および熟練保健師各々の保健師に対して1年間の業務報告と日々の業務記録をもとに1年間の業務内容をおいながら、インタビューを行った。

新任保健師には①その場で語っていた内容、②熟練保健師との語り合いの場が自分にどのような意味があったか、③熟練保健師の存在について考えたこと、熟練保健師には①その場で語っていた内容、②新任保健師との語り合いの

表1 対象者の概要

市 町 村	人口概数 (人)	新任熟練の別	経験年数	参加観察した場面の内容
A	3,000	新任 保健師	3年	乳幼児健診での母子への関わり 訪問の母親の様子について感じたこと 健診での母子の様子について感じたこと 母親をどのようにとらえるか
		熟練 保健師	26年	
B	10,000	新任 保健師	5年	日頃の自分たちの活動が本当に住民のニーズにそった活動になっているか 母子データの分析を見ながらの考え 乳幼児健診後のフォロー児への関わり
		熟練 保健師	27年	
C	70,000	新任 保健師	4年	機能訓練教室後の関わりについて 家庭訪問した療養者への関わり方 対象のとらえ方はどうしたらよいか 次年度の計画づくりをどうするか
		熟練 保健師	38年	

図1 データ収集方法



場が自分にどのような意味があったか、③新任保健師に対する関わりとそのときの思いを語ってもらった。新任保健師および熟練保健師の面接直後、各々の会話内容を提示しないで、新任保健師と熟練保健師の両者に対して、1年間における対話リフレクションについて自由に話し合いその内容を逐語録に起こしデータとして加えた。(図1)

これらデータの信頼性を高めるために、データ収集後の逐語録を新任保健師及び熟練保健師各々に提示し、内容について確認をした。

3. 分析方法

新任保健師と熟練保健師双方からの逐語録を共同研究者で何回も熟読し、対話リフレクションに意味をもったことを表現した部分を選び出した。その選び出した部分について前後の意味を捉えながら、1つの文節に表した。そして1つ1つの文節の意味を比較し関係性を捉えながらまとめ、サブカテゴリ、カテゴリ化し分析した。分析についてはもう1人の研究者とで検討し妥当性を高めた。

4. 倫理的配慮

研究者が文書と口頭で調査の主旨と方法、さらに匿名性とプライバシー保護について十分説明し、研究への協力について同意を得た。説明内容は協力しなくても何の不利益を高めないと、面接中の中断や拒否は自由であること、面接で得られた内容は本研究以外では使用しな

いこと等である。同意を得たところで収集したデータは施設名及び個人名が特定しないように扱い、録音したテープは逐語録作成後に破棄をする等、データの取り扱いに配慮した。

V. 結果

新任保健師と熟練保健師の対話リフレクションの意味について逐語録からえた文節を「」、サブカテゴリを<>、カテゴリを【】で、以下に表し、結果をまとめた。

1. 新任保健師における熟練保健師との対話リフレクションの意味 (表2)

新任保健師は75の文節から、12サブカテゴリ、そして【実践での自己成長】【自己の課題明確化】【成長への足がかり】【成長への先輩の存在意義】と、4つのカテゴリが抽出された。新任保健師の「実践の意味が確認できた」「人間関係がなにより大事だと気がついた」等の発言から<現状を把握する>のサブカテゴリが得られた。また「住民の話を聞くことの良さに気付いた」「住民の話を聞くことについて意識するようになった」「住民の状況を詳しく聞くようになった」「住民に気付いたことを説明できるようになった」と、<住民への関わりの変化>のサブカテゴリを抽出した。また「なぜそのような行動をするのか疑問を持つようになった」等、自分の行動を意識し行動の変化を語った内容から<行動の変化>がサブカテゴリとして抽出された。これらのサブカテゴリから自分の日々の活動を意識しながら実践している【実

表2 新任保健師カテゴリ

n = 75

カテゴリ	サブカテゴリ	内 容
実践での自己成長	現状を把握する	今までの活動の裏付けができた。
		今、やっていることを見ることができた。
		疑問のとらえ方が変わった。
		実践の意味が確認できた。
		自分で実施できているという実感がもてた。
		何が変なのか考えるようになった。
		状況の違いに気付くことができた。
		対象の捉え方に気づいた。
	住民への関わりの変化	人間関係が何より大事だと気がついた。
		住民に気付いたことを説明できるようになった。
		住民の状況を詳しく聞くようになった。
		住民を受け入れて話ができたらと思うようになった。
		住民が今どのような状況か住民に聞くようになった。
		住民の反応を聞くことで住民の反応の違いに気付くことができた。
		住民の話聞くことの良さに気付いた。
行動の変化	住民の話聞くことについて意識するようになった。	
	住民の考えていることを聞くようになった。	
	なぜそのような行動をするのか疑問を持つようになった。	
自己の課題明確化	現状に力及ばない気づき	意識して情報を収集するようになった。
		全体に関わる計画を立てることができるようになった。
		段階を追って計画を立てることができるようになった。
		住民にじっくり関わる時間がないことに気付く。
	現状を打開するための方向性の気づき	気になっている人への支援が悪化してからになっていることに気付く。
		基本が不十分だから臨機応変ができないことに気付く。
		対象のとらえ方の視点の少ないことを痛感した。
		早期の対応の必要性に気がつく。
		情報整理の重要性に気がつく。
		個々をじっくり見ていく重要性に気がつく。
成長への足がかり	学びへの意欲	当たり前に行っていることが本当に必要か振り返っていくことが必要と思った。
		個々のカンファレンスの重要性に気がつく。
		学生時代の学びを実践と結びつけて理解することだと考えた。
成長への先輩の存在意義	実践モデルとしての存在	自分の存在を住民に知ってもらおうと言う気持ちになった。
		気づきを実感し、自分の中から調べていこうという気持ちになった。
	具体的な助言	自分で考えてやりたいという自分があった。
		多くの実践現場を見に行きたいと思った。
		先輩保健師の対応を通して、住民が保健師を頼りにする存在としていることを実感した。
		実施の際に、先輩はどうするか常に考えて実践した。
		先輩の言葉から行動に繋がった。
		気付いた時の助言で、タイミングが良かった。
		実施後に具体的な助言をくれた。
	実践方向への導き	具体的なアドバイスから気付くことができた。
		きちんとアドバイスをくれるので、なおすことができる。
		困っていたら、その処置の方法を教えてくれる。
		抽象的でなく、より実践に近く具体的でわかりやすかった。
		実施内容がどうであったかを検討し、次の課題が見えるようにしてくれた。
	歩みにそった支援の存在	自分で先に考えた後、こういう方法もあると言われ方法を導かれた。(9)
		住民だったらどうなのかという点を踏まえ考えられるように投げかけてくれた。
		自分の目標が達成したら、次の目標がみえるように導いてくれた。
		自分で計画をたて実施後に方法を示してくれた。
受け止めから自己確認	先輩の話を書いて住民の関わりを学んだ。	
	先輩の学びからだんだん自信がもてるようになった。	
	困っていると今後の方向性を示してくれる。	
	先輩保健師の同伴による実践を振り返って分かると言うことがある。(2)	
支えられていると言う安心感	先輩の実践から自分の現在の状況と課題が明確になった。	
	目標を共にたてて共通認識していく。	
	自分だけでなく先輩と共に業務評価していった。	
	実践後反省した内容を聞いてもらうことで自分のものとなった。	
実践後反省した内容を聞いてもらうことで自分のものとなった。	それを受け止めてくれたことで確認ができた。	
	話をすると自分の中から見いだせる。	
	住民の関わりがこれで良かったかを確認できる。	
	自分の実践はどうだったかと確認できる。	
	先輩が自分の反省内容を理解してくれた。	
	分らないことは聞けるという安心感があり、心強かった。(2)	
経験を押しつけないから、自分の気持ちを言えた。		
大事なことは厳しく言ってくれるので大丈夫という気持ちがある。		
先輩が、見てくれている感じがした。		

践での自己成長】を抽出した。

更に「気になっている人への支援が悪化してからになっていることに気付く」を始め、新任保健師が実践のなかで、自分の〈現状に力及ばない気づき〉を掲げ、「早期の対応の必要性に気がつく」「個々をじっくり見ていく重要性に気がつく」ことから、〈現状を打開するための方向性の気づき〉を抽出した。この2つのサブカテゴリから、現状と向き合いその打開するための方向性を気付いていることで【自己の課題明確化】をカテゴリとした。さらに「気づきを実感し、自分の中から調べていこうという気持ちになった」「自分で考えてやりたいという自分があった」と、〈学びへの意欲〉をサブカテゴリとし、【成長への足がかり】としてカテゴリを抽出した。これまでの3つのカテゴリは、現状を把握し、そこから新任保健師の自己の課題を明確にするなかから、更に成長に結びようとしていた。このように、対話リフレクションにおいて新任保健師は【実践での自己成長】を感じ、【自己の課題明確化】をし、今後【成長への足がかり】を持とうとしていた。

「実施の際に、先輩はどうするか常に考えて実践した」と、熟練保健師は〈実践モデルとしての存在〉であり、「先輩の言葉から行動に繋がった」「実施後に具体的な助言をくれた」と熟練保健師の〈具体的な助言〉が、新任保健師の気づきや行動に繋がっていた。また「実施内容がどうであったかを検討し、次の課題が見える様にしてくれた」と計画を立てられるような内容から〈実践方向への導き〉を、「先輩保健師の同伴による実践を振り返って分かると言うことがある」から、〈歩みにそった支援の存在〉を抽出した。「実践後反省した内容を聞いてもらうことで自分のものとなった」「自分の実践はどうだったかと確認できる」と熟練保健師の〈受け止めから自己確認〉としていた。「また先輩が、見ていてくれる感じがした」と〈支えられていると言う安心感〉を持っており、これらのサブカテゴリをふまえて【成長への先輩の存在意義】とまとめられた。

2. 熟練保健師における新任保健師との対話リフレクションの意味（表3）

熟練保健師の聞き取りからは103の文節が得られ、7つのサブカテゴリ、そして【専門家としての成長】【新任保健師成長への役割】【共有することの意味】と、3つのカテゴリが抽出された。

【専門家としての成長】には「母に大切にしてもらったという思いが基にある」「子育てや生活体験が住民に関わるときに繋がる」等、熟練保健師自身が生活体験や実践の学びをとおし〈成長の自己把握〉をしていた。さらに「仕事は自分にとって大事なことである」等から〈仕事における自分の確立〉サブカテゴリがまとめられた。さらに「きちんとした知識の裏付けを持って住民に伝えていくことが必要である」「住民の抱えている状況に気がつく」等から〈実践への姿勢〉のサブカテゴリを抽出し、新任保健師と同様に仕事への姿勢について語られていた。熟練保健師自身が、「先輩とのやりとりの中で知らず知らずトレーニングをしていた」等から〈先輩からの学び〉のサブカテゴリにまとめられ、熟練保健師も先輩をモデルとして学んでいた。

新任保健師に対して「冗談を言いながら、言いやすい人間関係を作っていた」から〈先輩としての配慮〉のサブカテゴリでまとめられた。さらに新任保健師に対して「実践できなかった原因を探求する際に、先輩保健師の実践を思い出してもらうことで初めてそこに得ることがある」「先輩からの押しつけでは、主体的な仕事ができない」等から〈関わり方の姿勢〉、さらに「1人1人の事例からの学びを積み上げていくことを大切にしたい」等、新任保健師への〈成長への支援〉をふまえて【新任保健師成長への役割】とまとめられた。

「話し合うことで重要なことが見えてきた」等、熟練保健師は話を聴くとしてではなく、新任保健師と話を共有するとして捉え、その重要性を述べていたことから【共有することの意味】を抽出した。

表3 熟練保健師カテゴリ

n = 103

カテゴリ	サブカテゴリ	内 容				
専門家としての成長	成長の自己把握	母に大切にしてもらったという思いが基にある。(3)				
		子育てや生活体験が住民に関わるときに繋がる。(3)				
		様々な場面に自分を置いて常に訓練していたことに気がつく。(2)。				
		自分を成長させたのは住民の喜ぶ反応であった。(2)				
		予測が持てるようになって仕事もおもしろみが持てた。				
		就職して15年目に計画からまとまって全体が見えてきた。 実践した内容についての会話が楽しかった。				
	仕事における自分の確立	仕事は自分にとって大事なことである。 自分の気持ちの問題だから他人は関係ない。 どのような仕事もそこから発展し無駄なことはない。 自分でやっていいと思うことをやってみる。 自分で実践しながら考えていくことが大事である。 話をする中で、自分で確認ができる。 確認して実践できると楽しい。 自分で1つ1つつくっていくということである。 実践して自分で気づくことが重要である。 自分で気付いたことだから広がっていく。 自分というものが自分の中で育ててきているときに初めて他の人とは別のものと認めることができる。 きちんとした知識の裏付けを持って住民に伝えていく必要がある。 住民とのやりとりの中で疑問が明らかになる。 問題の本質に気付くことができた。 1つの問題から、別の問題にたどり着くことができた。 問題の本質にたどりつくことができる。 住民の気付かない点は伝えていかなければいけない。 住民の気持ちを確認するようになった。 住民ときちんと向かい合うような関わりの必要性に気がついた。 住民に対する向かい合い方が変わってきた。 自分の住民への関わりを常に思い起こしている。 漠然と仕事をするのではなく、きちんと目的をもった関わりをしていくことが大切 変化していく授明の情報収集するポイントが不明確であることに気がつく。 チームとして保健師の考えを一致させた指導をしている。 1人1人の住民にじっくり聞く必要性に気がつく。(2) 住民の抱えている状況に気がつく。 今の住民の状況に合わせて対応を変えていく。 当たり前と想っていることはだめであることに気がつく。 住民の変化に気がつく。 生活力の把握の重要性に気がつく。 個々の生育歴にさかのぼった住民理解の重要性に気がつく。				
		実践への姿勢	先輩とのやりとりで知らず知らずにトレーニングしていた。(4) 住民の声を乗せて仕事の方向性を考えていくことを先輩から学んだ。(3) 住民との関わりと保健師活動とを先輩が結びつけてくれた。(2) 先輩がデータを持って話をしてくれるので仕事への確信に繋がる。 自分だったらどうするか先輩たちの実践を通して考えていた。(3) 何のため、誰のために仕事をするかを考えさせてくれた。 先輩保健師の仕事の方向性やビジョンと言葉から学んだ。 先輩の明確な方向性にそって仕事をとらえるようになった。 先輩の投げかけから考えることに繋がった。 先輩の投げかけで自分のものにしやすかった。			
			先輩からの学び	気持ちが分かることが大切と思っていた。 物が考えられることが大切と思っていた。 各々の良さをお互いに伝えあっていい方がいい。 決めつけてはいけないということに気がつく。 自分の考えで突っ走ってはいけないことに気がつく。 最初はずっと観察していた。(2) 冗談を言いながら、言いやすい人間関係を作っていた。(3)		
				先輩としての配慮	実践できなかった原因を探求する際に、先輩保健師の実践を思い出してもらうことで初めてそこに得ることがある。(3) 主体性をもつためには意見をまず認め、次にこちらの話を納得したことで可能になると考える。(2) 先輩からの押しつけでは、主体的な仕事ができない。 本人には自分がつくりあげてきたことを大切にしてほしい。 彼らを落ち着いて私の中で認めることができていた。(2)	
					関わり方の姿勢	2人の検討で情報収集の視点を明確にした。 1人1人の事例からの学びを積み上げていくことを大切にした。 住民がどう思っているかが大切であることを伝えた 何を理解してもらうかを考え、自分でやってみるという言葉投げかけた。(3) 実践後に、理解してもらいたいことを投げかけた。(3) 実施後すぐに意欲がもてるような関わりをもった。(3) 健康教育後に住民の反応と自分が観察したことを伝えた。(2) 共感を得るようにやって見せて具体的に見えるようにする。(2) 自分のやりたい仕事を大切に他の保健師に主張してほしいと伝えた。
						成長への支援
	共有することの意味					

3. 新任保健師と熟練保健師との相互関係について

上記1、2にあるように、新任保健師と熟練保健師の抽出されたサブカテゴリ、カテゴリから、保健師活動の実践後の対話リフレクションにおいて、新任保健師は【実践での自己成長】を、熟練保健師は【専門家としての成長】のカテゴリを抽出でき、共に成長について語っていた。また新任保健師は先輩を<実践モデルとしての存在>としていた。熟練保健師は「自分だったらどうするか先輩達の実践を通して考えていた」のように<先輩からの学び>を通して、「先輩からの押しつけでは、主体的な仕事はできない」というような<関わり方の姿勢>で新任保健師に関わっていた。そして新任保健師は「実施内容がどうであったかを検討し、次の課題が見えるようにしてくれた」と<実践方向への導き>を受けていた。その過程を通して新任保健師は「なぜそのような行動をするのか疑問を持つようになった」というような<行動の変化>をしていた。さらに新任保健師は【成長への先輩の存在意義】と「それを受け止めてもらったことで確認ができた」と先輩からの支援を受け止めていた。熟練保健師の関わりは新任保健師に【自己の課題明確化】を導き、さらに<支えられていると言う安心感>をあたえ、新任保健師において【成長への先輩の存在意義】とし、熟練保健師においては、【新任保健師成長への役割】を述べ、相互にその関係の重要性を認めていた。

VI. 考察

1. 新任保健師と熟練保健師のとの対話リフレクションにおける意味

新任保健師は【実践での自己成長】さらに【自己の課題の明確化】【成長への足がかり】、熟練保健師も【専門家としての成長】と日常における対話リフレクションにおいて成長している自分を捉えていたことが伺えた。新任保健師は、「今、やっていることを見ることができた」と述べているように、自分は何を実践しているの

かを見つめ、捉えている自己を確認していた。「今までの活動の裏付けができた」や、実践の中で「住民の話聞くことの良さに気付いた」と住民への関わり的重要性に気づき、また自己が現状に及ばない課題を見出し「気づきを実感し、自分の中から調べていこうという気持ちになった」「全体に関わる計画を立てることができるようになった」と課題解決への行動に繋がたと考えられる。澤本は¹⁹⁾、『自己を閉じることなく、相手に向かって開き、説明しなくてはならない』と指摘しており、自分の内実を言語化し先輩に語ることで、自分を写しだし、自己を客観視していくことを可能とし、様々な自分の変化を見いだすことを可能とすると考える。

熟練保健師においても、新任保健師と同様に、これまでに成長してきた自分の過程を確認し「仕事は自分にとって大事なことである」と、仕事における自己を確立し、実践に向かっている自分の姿勢を新任保健師に伝えていたと考えられる。また熟練保健師が【共有することの意味】と述べていたように、自分の状況を語りながらも、相手の語りを聞くことで、自分の実践での変化を比較しさらに見つめていることが伺えた。

このことから、市町村の日々展開する保健師活動において新任保健師と熟練保健師との対話リフレクションは、自己成長を共に確認し、また相互に成長を促進する場として重要であることが考えられる。そのためには、単に漠然と語り合うのではなく、双方に相手に向かって自己を開く関係が重要であると考えられた。

2. 新任保健師と熟練保健師との相互関係における熟練保健師の役割

新任保健師は、「先輩が自分の反省内容を理解してくれた」と熟練保健師が自分を理解してくれたと感じていた。さらに「先輩の実践から自分の状況と課題が明確になった」と、自分の実態が明確になると先輩からの支援を自分とは異なる支援として受け止め、熟練保健師から自分と異なる捉え方、対処方法を学んでいた。これは先輩を鏡として、自分自身を見だし、自分

の今の掲げている枠組み（フレーム）ではなく他の枠組み（フレーム）として先輩から学んでいるということに繋がる²⁰⁾。このことは、自分の枠組み（フレーム）を客観視でき、そこに熟練保健師から客観的データを提示されることで、異なった視点で自分を見る目を獲得できる。そして、自分のできることと自分が現状に及ばない実態を見極め、現状に及ばない現状を打開するための方向性を導き出すことができると考える。澤本は²¹⁾ 教師の悩みや問題を受容的に聞いて、これを解決するヒントを引き出し、悩む教師が問題の本質に気づく契機を作る役割機能をメンターとしているが、熟練保健師の存在はその機能に繋がっていたことが考えられた。

熟練保健師は、新任保健師との対話リフレクションを通して、自分の成長過程を振り返りその過程で気づいた専門家としての姿勢や地域の住民の健康を思い、住民の側にたてる保健師になってほしいという願いを伝えていた。熟練保健師は、新任保健師の実践を尊重しつつ、新任保健師自らが実践したいことを明確化させた後、地域住民の理解の重要性や専門家としての視点を常に新任保健師に投げかけていたといえる。さらに新任保健師が気づかない住民の状況をふまえ、新任保健師が行動に結びつくような具体的な助言をしていた。これらのことから、新任保健師は専門家として何が不足しているのかを見極める事ができた時に、熟練保健師の願いや必要とする考え方、知識やスキルをふまえた実践を示されたことで新任保健師の学びに繋がったと考える。村上²²⁾ は『ローモデルとは人間が何らかの社会的役割を果たすために見習いたいと知覚する行動や態度を示す人物である』とし、人間はローモデルが示す行動に共感し、同一化を試みながら行動や態度を修得すると指摘している。新任保健師において「実施の際に、先輩はどうするか常に考えて実践した」と述べていたように、熟練保健師が保健師のモデルとして位置していたことが伺える。澤本も『メンターは悩む教師にとって「教師モデル（教師イメージ）」の1つに成りうる』と指摘して

いる²³⁾。

熟練保健師は、新任保健師の主体的な仕事を可能とするために、「最初はずっと観察していた」「冗談を言いながら、言いやすい人間関係をつくっていた」と、新任保健師の特徴、今抱えていること、感じていること等を把握し、その状況に対応するように、意図的な関わりをもっていただけと考えられる。熟練保健師が新任保健師の戸惑いを受け止め、事実をみようとする姿勢をサポートするという関わりが、新任保健師の成長を可能としたと考えられる。事実、新任保健師は「分からないことは聞けるという安心感があり、心強かった」と述べていた。これは澤本が指摘している²⁴⁾ ように『悩む教師の心を受け止め、解放し必要に応じて励まし、叱り、希望を失わないようにさせる』というメンターとしての熟練保健師の位置づけが重要性であると考えられる。

澤本は『困難な現実身に身を置きながら、自己の力不足を自覚し、共同を求める教師が出会い、学び合う集団＝ネットワークの形成』の重要性を指摘したうえでメンターをおいている²⁵⁾。メンターとは実践活動に関わる助言・指導プロセスのメンタリングを行う者をいい、教師の成長にとってメンターの役割を果たす先輩教師との出会いに大きな意味があると指摘している。このことから市町村保健師においても、住民の身近な支援者として専門家としての力量形成するためには、新任保健師と熟練保健師とが対話リフレクションをする場を確保し、さらに熟練保健師がメンターとして役割を担い、新任保健師の成長に欠かせない存在として位置づけることが重要であると示唆された。

VII. 結 論

1. 新任保健師の熟練保健師との対話リフレクション実施の意味については、【実践での自己成長】【自己の課題明確化】【成長への足がかり】【成長への先輩の存在意義】の4つのカテゴリーが得られた。
2. 熟練保健師の新任保健師との対話リフレク

ション実施の意味については、【専門家としての成長】【新任保健師成長への役割】【共有することの意味】の3つのカテゴリが得られた。

3. 1及び2のような意味のあった新任保健師と熟練保健師との対話リフレクションにおいて、熟練保健師はメンターとしての役割を果たしていたことが示唆された。

謝辞

協力してくださった3市町村6名の保健師は、熱心に日々の保健師活動を繰り広げられ、その中での対話リフレクションの場面に、快く参加させてくださいました。大変貴重な時間を割いて、本研究にご協力して頂いたことを心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 市町村保健活動体制強化に関する検討報告書, 週刊保健ニュース, 1371号2007.
- 2) 久常節子: 検診結果からの出発—成人病予防のための集団学習—勁草書房, 1988.
- 3) 松下拓編: 保健婦の力量形成—集団で取り組む保健婦自主学習の記録—勁草書房, 1995.
- 4) 佐伯和子, 和泉比佐子, 宇座美代子他: 行政機関に働く保健師の専門職務遂行能力の発達, 日本地域看護学会誌, 7(1), 16-22, 2004.
- 5) 看護基礎教育の充実に関する検討会: 保健師教育の技術項目と卒業時の到達度(案) 暫定版, 平成19年4月16日.
- 6) 澤本和子: 教師の成長とネットワーク, ぎょうせい, 127-137, 1999.
- 7) 中田康夫, 田村由美, 石川雄一他: 看護におけるリフレクションとEvidence-Based Nursing, Quality Nursing, 9(1), 2003.
- 8) 近田敬子, 大金びろみ, 渋谷美香他: 特集リフレクションを意識した看護および教育, Quality Nursing, 7(8), 4-38, 2001.
- 9) 澤本和子: 教師の発達を支える授業リフレクション研究方法の開発, 平成7~9年度科学研究成果報告書, 1998.
- 10) 人間教育研究協議会編: 教師の力量を高める, 教師が身につけるべき授業の力, 金子書房, 25-35, 2000.

- 11) 無藤隆, 澤本和子他編: 学びを育てる授業デザイン, ぎょうせい, 1-22, 85-133, 2002.
- 12) 藤岡完治, 澤本和子編: 授業で成長する教師, ぎょうせい, 127-128, 1999.
- 13) 菊池昭江: 看護専門職における自立性と職場環境および職場意識との関連, 32(2), 2-13, 1999.
- 14) 村松照美: 健康学習支援における保健婦の力量形成過程, 第14回日本教育工学会誌, 73-74, 1998.
- 15) 村松照美: リフレクションによる保健婦の力量形成, 第57回日本公衆衛生学会, 45(10), 1998.
- 16) 村松照美: 健康学習支援における保健婦の力量形成過程の分析, 保健婦雑誌, 1070-1075, 2001.
- 17) 村松照美: 新任保健師の力量形成におけるメンターとしての熟練保健師の役割, 第5回日本教師学会, 6, 2003.
- 18) 指導者育成プログラム作成に関する検討会報告書, 保健ニュース, 1417-1号, 2007.
- 19) 前掲12) 135-137.
- 20) ドナルド・ショーン: 専門家の知恵, ゆみる出版, 106-108, 2001.
- 21) 前掲12) 127-128.
- 22) 村上みち子, 舟島なをみ: 看護学教員のロールモデル行動に関する研究, 看護研究, 35(6), 35-46, 2002.
- 23) 前掲12) 127-128.
- 24) 前掲12) 127-128.
- 25) 前掲12) 127-128.

参考文献

- 1) 伊藤祐紀子: 患者—看護者関係における共感のプロセス, 日本看護科学会誌, 23(1), 14-25, 2003.
- 2) 須藤真樹: 新人保健師の家庭訪問, 保健婦雑誌, 59(1), 16-21, 2003.
- 3) 望月朝味, 金山みずほ: 新任保健師と先輩保健師とが学び合う研修, 保健婦雑誌, 58(10), 830-837, 2002.
- 4) 片桐雅隆: 自己と「語り」の社会学, 世界思想社, 2000.
- 5) D.A.Shon; The Reflective Practitioner; How Professionals Think in Action. Basic Books, New York, 1983.

Effects of the Reflection by the New and Skilled Public Health Nurses

MURAMATSU Terumi WATANABE Yuuya

Key words : municipalities, new public health nurse, skilled public health nurse, reflection, mentor